

★明治20年（一八八七年）創刊の『国家学会雑誌』は、「憲法、行政、法律、財政、外交、経済、統計等国家学ニ属スル論說事項ヲ掲載シテ斯学ヲ研究スルノ資ニ供スル」ことを目的に、百余年の長期間にわたり今日もなお刊行され続けている、學術雑誌の中でも最大級の資料である。

本復刻版は、今日の法律・政治学を中心とする學術研究の宝庫である。

国家学会 編

不二出版

# 國家學會雜誌

【明治期】 全57卷

・体裁——A5判・上製本クロス装・配本——全12回配本

・頁数——各巻平均650頁・総37、150頁

・価格——本体揃価格1、140、000円（税込定価1、174、200円）

復刻版刊行開始!

★推薦人——碧海純一・今井清一・斎藤眞・坂本義和・杉原泰雄・松尾尊允（五十音順）

# 近代日本の憲政の証言

坂本義和 ・ 明治学院大学教授

『国家学会雑誌』は、今日では法律学・政治学の専門家以外には余り知られていない。しかし、この雑誌が明治以来の日本で果たしてきた役割は、私たちが考えるより、はるかに大きい。

第一に、国家学会は、公法学、政治学、経済学の研究の振興を目的として、明治二〇年に東京大学（帝国大学法科大学）で発足したが、それは単に学究的な性格のものにとどまらなかった。この学会の誕生は、伊藤博文の激励に負うところが大きかったといわれるように、明治憲法の制定をひかえ、その意味を国民に知らしめるための世論指導を目的としていた。それはドイツ流の国家学を軸として、今日でいう「論壇」のはしりその役割を演じたのである。

第二に、そうした性格を反映して、学会はその例会での講演に力を注いだ。伊藤などの念頭にあった「世論」の担い手は限られたエリート層であり、講演には「朝野紳士および学術に名のある諸士」が招かれた。こうした講演の掲載刊行が、当時の『国家学会雑誌』の主要な役割の一つであり、時代を知る資料として興味深いものがある。

第三に、初期の『国家学会雑誌』に目立つのは、外国人の学者の寄稿が少なくないことである。明治の東京大学が西欧の多くの学者を受入れ後発国の大学として彼らの学識の吸収と活用を努力していたことが一見して明らかである。日本の大学や学問の、西欧指向の「国際化」の歴史について考える上でも参考になる。

第四に、後発国日本が、明治末に帝国主義化していく変化も、二つの形でこの雑誌に反映されている。一方では、日露戦争に際して主戦論を唱えた「七博士建白」、それをめぐる「大学教授の言論の自由」の主張が、この雑誌の特集号（明治三八年）として生まれ、貴重な記録となっている。他方で、この頃から、国家よりも社会に焦点をずえる論文が『国家学会雑誌』にもふえて、東京大学の知的エリートの間でも、国家学から社会科学へと学問的関心が移動していくさまが、よく読み取れる。

第五に、大正をへて昭和に入るとともに、この雑誌をめぐる政治状況

が厳しさを増してくることが、紙面からもうかがわれる。その中には、学問の場での時代への抗議を示し、後に戦後に開花する学問的蓄積をあらわす論文もみられるが、やがて太平洋戦争下に休刊にいたる。

第六に、戦争の終結とともに、この雑誌にも新しい時代が訪れる。その端的な現われが昭和二十一年に三号にわたって、東大法学部のスタッフの総力をあげて編集された「新憲法の研究」という特集である。これは翌年、同名の本として刊行され、新憲法の解釈の道しるべとして、世論に大きな影響を及ぼした。

このように見てくると、明治憲法にかんする啓蒙にはじまり、戦後新憲法の信頼しうる解釈におよぶという、二つの憲法を軸とする『国家学会雑誌』の歴史は、近代日本の公法と政治をめぐる知的認識の歴史についての貴重な証言とって過言ではない。

## 政治史研究の立場から

今井清一 ・ 湘南国際女子短期大学教授

『国家学会雑誌』を私が始めて手にしたのは、太平洋戦争の真最中だった。恒例の一月号特集「各国政治事情」はもうなくなっており、一九四四（昭和一九）年の初めには特集「近代日本の成立」がうすくなった雑誌で三号続いた。肩書は略すが、これには尾佐竹猛、岡義武、辻清明、丸山真男らの論文が載り、「学徒出陣」で数少なくなった学生たちの話題となった。

最近、たまたま明治末期の『国家学会雑誌』を調べていて、当時の政治問題が随分と取り上げられているのが付いた。当時は英国で上院の権限縮小問題が政界をわき立たせていたが、一九一〇（明治四三）年八月号と一二年一月号にはこれに関する小野塚喜平次（小野塚喜平次）の講演筆記と論文とが掲載され、国会法が制定された一九一一年の夏が未曾有の炎熱だったことなども含めて経過と意義を詳論している。各国の立憲政治論もある。最近の研究と比べても面白い。その間に富井政章の「貴族院の将来」がある。シーメンス事件と時を同じうして松波仁一郎の軍法会議公開論が載っている。雑誌欄では内外の時事問題がかなり詳しくとりあげられ、若手の執筆も多い。

第一次世界大戦当時までは経済学科が法科大学の中に含まれていたこ

明治二十二年三月十五日發行

### 目次

- 國家學會開設ノ主旨 渡邊洪基
- 帝國大學總長 渡邊洪基
- 財政學一編 和田垣謙三
- 法科大學教授 和田垣謙三
- 行政學比較研究ノ必要ヲ論ス
- 法科大學教授 末岡精一
- 文藝士
- 日本及ヒ歐洲人口統計結果ノ比較
- 法科大學教授



# 國家學會雜誌

第壹號

國家學會雜誌第壹號

明治二十年三月十五日發行

### 論說

○本會開設ノ主旨

渡邊洪基述

余ハ今夕會員諸氏ノ需ニ應シ余カ意思ヲ以テ聊カ開會ノ主旨ヲ演ヘントス然レモ余ハ固ヨリ國家學ヲ以テ専門トナスモノニ非サルカ故ニ平生耳學ト讀書トニヨリ聞知會得タル所ニ據リ之ヲ略述スルニ止ルヘシ

國家學會雜誌第壹號

第百二十四號

### 目次

- 小引(編纂主任)
- 學者ノ言論ニ壓迫ヲ加フルノ不可ナルヲ説ク 法學博士 金井 延
- 學說ト政論 法學博士 寺 金
- 分限令ノ解釋ト教授ノ言論 法學博士 岡 尾
- 學問ノ獨立ト學者ノ責任ト戸水教授ノ休職事件ニ付テ 法學博士 小野塚喜平次
- 大學教授ノ自由ト其ノ制裁 法學博士 高野 岩
- 學問ノ獨立ニ付テ 法學博士 川 孝
- 帝國大學教授ノ地位 法學博士 上 杉
- 大學教授ノ職責 法學博士 志 田
- 權力ノ濫用ト之ニ對スル反抗 法學博士 美濃部 達吉
- 國際法學者ノ言論 法學博士 高橋 克彦

# 國家學會雜誌

第十九卷 第十號

○學者ノ言論ニ壓迫ヲ加フルノ不可ナルヲ説ク

### 論說

學者ノ言論ニ壓迫ヲ加フルノ不可ナルヲ説ク

法學博士 金井 延

蓋ニ戸水東京帝國大學法科大學教授ノ文官分限令第十一條第一項第四號ニ據リ突然休職ヲ命セラレ而カモ其ノ同教授ノ奉職セル大學ノ事務即チ職務ノ都合ニ依リ必要ナルガ爲メニアラズシテ、職務ノ都合ニ依リ同教授ノ在職ヲ必要トスルノ事實明白トナルヤ、法學者並ニ法律家ノ大多數ハ處分ノ違法ナルヲ唱ヘ、學界ハ舉テ其ノ少ナクトモ不穩當ナルヲ認定セリ、法令ノ正解上其ノ違法ナルトノ公論ニハ極メテ強大ナル根據アルガ如シ余モ亦之レニ敬服シテ毫モ疑ハザラムト欲スルモノナレドモ今マ故ラニ之ヲ詳論セズ此問題ニ關聯シテ起レル更ラニ重大ナル一般の問題ノ存スルモノアレバナリ、何ソヤ曰ハク學者ノ言論自由ノ問題即チ是ナリ、此問題ハ特ニ一個ノ戸水教授ニミ關スル問題ニアラズ、獨リ政法經濟ノ學科ヲ専攻スル者ノミノ議スルニ任スベキ問題ニアラズ、否ナ實ニ學術界全部

ともあって、経済、労働、社会政策、さらには都市問題などの論文や紹介も目立つ。時報欄、学会記事、新刊紹介なども時代の動きを伝え、なかなか面白い指摘もある。また総合雑誌も少ない時代だけにいろいろな役割を担ったようである。美濃部達吉、上杉慎吉の天皇機関説をめぐる憲法論争がまず本誌で起こり、ついで舞台が博文館発行の『太陽』に移されたことはよく知られている。本誌が復刻されるとさまざまな問題が発見されそうに楽しみである。

# 『海外政治の動向』を伝える

斎藤 眞 ・ 国際基督教大学

「一九四〇年。それは砲煙の中に暮れた」

これは、『国家学会雑誌』——特輯『海外政治の動向』（五六巻一、二、三、四号）における、故岡義武先生執筆の巻頭「国際政治概観」の冒頭の言葉である。続いて、アジア、ドイツ、フランス、イギリス、アメリカ、（ソ連は翌月）についての報告論文がある。ちなみに、イギリスは佐藤功先生、アメリカは故高木八尺先生の執筆になっている。

『国家学会雑誌』は、一九二二年から、毎年「海外政治事情」の欄を設け、一九三九年からは「海外政治の動向」とし、一冊全体をあてて特集をおこなっていた。今でこそ海外の情報は過多なほど入手されるが、戦前限られた資料に基づいて、しかも国家主義の風潮の下で、これだけ客観的、学術的に、海外の政治につき同時代的分析を行い、公刊したものは他にないであろう。

この「海外政治の動向」は、『国家学会雑誌』の使命のなかでは、ごく限られた分野かもしれないが、今日それ自体、外国政治史、国際政治史研究上の貴重な史料となつているといえる。復刻版で、再び目にすることができるところを、喜ぶものである。

# 時代との大きなかわり

杉原泰雄 ・ 一橋大学教授

『国家学会雑誌』が復刻される。明治憲法下においては、それは、社会諸科学の総合学術雑誌といふべきものであった。憲法関係についていふならば、それは準学術的な性格をもつものであった。各時代の証人として、各時代の様相分析・紹介しているだけではなく、各時代の唱導者としての政治と深くかかわつてもいた。

憲法の分野では、明治憲法の制定期には、その導入と運用に備えて、明治憲法の基礎理論、その各部分の解説論、選挙・予算・地方公共団体等にかんする憲法付属法のあり方が精力的に論じられている。日本における憲法学の事始めの様相がよく現れている。

大正デモクラシー期には、階級闘争、社会主義、現代市民憲法の内外における出現という事情もあつて、社会主義や労働運動が検討の対象とされ、また、ワイマル憲法の紹介、社会国家理念、社会政策の導入、参政権の拡大がしきりと論じられている。

昭和一桁段階では、大正デモクラシー期の傾向を継承しつつも、同時にファシズム論や国家主義論の登場もみられる。昭和一〇年代には、ナチス・ドイツの特集、執行権強化の特集が生まれ、統制経済の問題が中心問題として登場する。

明治憲法下における憲法政治と憲法学の動向を知ろうとするならば、手にしないわけにはいかない重みをもっている。研究者・研究誌の時代とのかかわり方についても、考えさせられる経験を含んでいるようである。

# 尽きぬ生命力

松尾尊允 ・ 京都大学文学部教授

『国家学会雑誌』が、現在でも、日本の政治学界において卓越した地位を占めていることはいうまでもないが、戦前、とくに第一次大戦直後までは、ひろく社会科学研究の大宗であった。政治学のみならず、公法学や経済学の日本における発達の歴史を調べようと思えば、まず本誌をひもとかねばならない。

## 國家學會會員姓名 (明治二十一年一月調査)

在豆腐郡 ○文士 井上 園丁	在群馬 石井 常英	在群馬 板垣不二男	在群馬 石塚 英藏	在群馬 伊集院彦吉	在群馬 原口 敏行	在群馬 須藤 正一	在群馬 伴野 乙彌	在群馬 尾藤 泰三	在群馬 野村 繁	在群馬 菅野 謙	在群馬 菅野 謙	在群馬 菅野 謙	在群馬 菅野 謙	在群馬 菅野 謙
在群馬 菅野 謙	在群馬 菅野 謙	在群馬 菅野 謙	在群馬 菅野 謙	在群馬 菅野 謙	在群馬 菅野 謙	在群馬 菅野 謙	在群馬 菅野 謙	在群馬 菅野 謙	在群馬 菅野 謙	在群馬 菅野 謙	在群馬 菅野 謙	在群馬 菅野 謙	在群馬 菅野 謙	在群馬 菅野 謙
在群馬 菅野 謙	在群馬 菅野 謙	在群馬 菅野 謙	在群馬 菅野 謙	在群馬 菅野 謙	在群馬 菅野 謙	在群馬 菅野 謙	在群馬 菅野 謙	在群馬 菅野 謙	在群馬 菅野 謙	在群馬 菅野 謙	在群馬 菅野 謙	在群馬 菅野 謙	在群馬 菅野 謙	在群馬 菅野 謙
在群馬 菅野 謙	在群馬 菅野 謙	在群馬 菅野 謙	在群馬 菅野 謙	在群馬 菅野 謙	在群馬 菅野 謙	在群馬 菅野 謙	在群馬 菅野 謙	在群馬 菅野 謙	在群馬 菅野 謙	在群馬 菅野 謙	在群馬 菅野 謙	在群馬 菅野 謙	在群馬 菅野 謙	在群馬 菅野 謙
在群馬 菅野 謙	在群馬 菅野 謙	在群馬 菅野 謙	在群馬 菅野 謙	在群馬 菅野 謙	在群馬 菅野 謙	在群馬 菅野 謙	在群馬 菅野 謙	在群馬 菅野 謙	在群馬 菅野 謙	在群馬 菅野 謙	在群馬 菅野 謙	在群馬 菅野 謙	在群馬 菅野 謙	在群馬 菅野 謙

私のような日本近代史研究者にとっても、本誌は重要な資料である。著作集はおろか単行本にもおさめられていない吉野作造や佐々木惣一の執筆した重要な論文の数多くが、本誌に見出される。それらは彼らの思想を研究するための材料となるだけでなく、それ自体がまだ生命力を持っている。たとえば吉野の「清国在勤の日本人教師」は、この主題に関する最近の専門書にも利用されていない貴重な体験記録であり、佐々木の「臨時外交調査会と憲法の一大重大原則」は、寺内正毅内閣に対するもつとも徹底的な学問的批判である。

十五年戦争下に書かれた河村又介の選挙制度史研究や、岡義武の日本近代政治史研究も、単に戦時下における学問的抵抗の一資料にとどまらない、水準の高さを示している。

事情はおそらく他専攻の人びとにとっても同様であろう。本誌の復刻が益するのは、政治学界だけではないのである。

## 『国家学会雑誌』復刻について

碧海純一 ● 関東学院大学教授

『国家学会雑誌』は『法学協会雑誌』と並んで旧東京帝国大学法学部及び現東大法学部の機関誌である。その刊行は明治二〇年に遡り、第二次大戦中の戦災もあって、バックナンバーを揃えることは現在では至難となってしまった。このたび、書籍、定期刊行物、資料などの復刻に実績のある不二出版社によって、その創刊号から昭和一九年に至る全号の復刻版が順次出版されることは諸大学、研究所、図書館などにとって大きな福音である。

その主たる内容は政治学、公法学、基礎法学にわたり、日本の近代化の過程におけるこれらの学問の発展の研究に資するところ極めて大であろう。特に、新設の法学部や図書館にとっては、不可欠の文献と言つてよい。望蜀の感を述べるのが許されるならば、本誌の戦後の号及び『法学協会雑誌』の復刻も今回の企画に続いて漸次実現することを期待して止まない。

第 二 百 二 十 一 号

### 禁 轉 載

目 次	
講演 ○ 清國ノ新教育制度	文學士 澤柳政太郎
○ 輓近本邦人口増加ノ比較研究	法學博士 高野若三郎
○ とまず、だきのノ經濟學說 其四	法學博士 福田 徳三
○ 清國ノ貨幣制度(其二)	高等師範 學校教授 佐野 善作
○ 條約ノ國內ニ於ケル效力	法學博士 美濃部達吉
○ 國稅徵收法ノ改正ニ就イテ	法學士 常吉 徳壽
○ 日本文明の研究(吉野作造) ○ 條約の國法上の效力 <small>法學研究會に於て討論せられたる</small>	
○ 鈴木券太郎氏著『犯罪論及女性犯人』を讀みて(河上肇)	○ 法科
○ カライルの『近世貨幣發展論』を讀みて(同人)	
○ 會報	
大學列品室 ○ 海外新刊書目(吉野作造、河上肇)	

# 國家學會雜誌

第 十 九 卷  
第 七 號

國家學會雜誌第十九卷第二百一十五號 明治三十八年一月一日發行

### 講 演

#### 開國ト日露戰爭

伯爵 大隈 重信

陽氣ガ悪クテ兎角病人ガ多イ今加藤博士モ咳ガ出ルト云フコトデアッタ私モ實ハ三四日風ヲ引イテ咳ガ出マス夜分ハ安眠ガ出来ナイト云フ位デアラカラ前以テ御断リヲシテ置キマスガサウ云フ譯ダカラ餘リ良イ考モ出ナイデセウ殊ニ加藤博士ノ如キ大層有益ノ御話ノ後ニ私ノ粗雑ナル議論ハ少シ御困リデアラウ併シ中々問題ハ餘程大キナモノデアラハ是ヲ御話スルニハ随分五六時間掛ル所ガ今日ハ大會デ段々園田君ナリ加藤君ナリノ御演説ノ後最早時ガ許サユウデアラ最早五時ニ近イ其上ドウモ是モ老人ノ氣ノ毒ナコトニ目ガ悪クテ書イタ物ガ能ク見ユスカラ極ク縮メマシテ簡單ニ御話ヲ致シマスガ或ハ其爲メニ盡サナイカモ知レナイ、

『国家学会雑誌』〔明治期〕復刻版概要

・巻数——全57巻  
 ・配本——全12回配本（'92年6月～'96年7月）  
 ・体裁——A5判上製本クロス装  
 ・分売——各巻ごとの分売可（各巻＝20,000円）

・頁数——各巻平均650頁  
 ・価格——本体揃価格1,140,000円  
 （税込定価1,174,200円）

配本案内

復刻版巻数	原本号数	発行年月	配本年月(西暦)	本体価格
第1回配本——第1～2巻	第1～22号	明治20年3月～21年12月	'92年6月——4万円	'92年度
第2回配本——第3～7巻	第23～64号	明治22年1月～25年6月	'92年12月——10万円	'92年度
第3回配本——第8～12巻	第65～94号	明治25年7月～27年12月	'93年7月——10万円	
第4回配本——第13～17巻	第95～124号	明治28年1月～30年6月	'93年10月——10万円	'93年度
第5回配本——第18～22巻	第125～154号	明治30年7月～32年12月	'94年1月——10万円	
第6回配本——第23～27巻	第155～184号	明治33年1月～35年6月	'94年7月——10万円	'94年度
第7回配本——第28～32巻	第185～206号	明治35年7月～37年4月	'94年10月——10万円	
第8回配本——第33～37巻	第207～226号	明治37年5月～38年12月	'95年1月——10万円	'95年度
第9回配本——第38～42巻	第227～246号	明治39年1月～40年8月	'95年7月——10万円	
第10回配本——第43～47巻	第247～266号	明治40年9月～42年4月	'95年10月——10万円	'95年度
第11回配本——第48～52巻	第267～286号	明治42年5月～43年12月	'96年1月——10万円	
第12回配本——第53～57巻	第287～306号	明治44年1月～45年8月	'96年7月——10万円	'96年度

『国家学会雑誌』続刊予定

【大正期】・巻数——第58～104巻・全47巻

・大正元年9月～大正15年12月  
 ・'96年10月より逐次刊行予定

【昭和期】・巻数——第105～160巻・全56巻

・昭和2年1月～昭和19年8月  
 ・〔大正期〕刊行後逐次刊行予定

本カタログ中の表示価格は、全て消費税を含んでおりません。

※弊社は注文制です。お近くの書店へご注文ください。

不二出版

〒113 東京都文京区向丘一丁目二二番  
 TEL 〇三―三八―二一四四三三  
 FAX 〇三―三八―二一四四六四  
 振替 へ東 京 六一九四〇八四

★明治20年（一八八七年）創刊の『国家学会雑誌』は、「憲法、行政、法律、財政、外交、経済、統計等国家学ニ属スル論說事項ヲ掲載シテ斯学ヲ研究スルノ資ニ供スル」ことを目的に、百余年の長期間にわたり今日もなお刊行され続けている、學術雑誌の中でも最大級の資料である。

本復刻版は、今日の法律・政治学を中心とする學術研究の宝庫である。

国家学会 編

不二出版

# 國家學會雜誌

【大正期】 全50卷

・体裁——A5判・上製本クロス装・配本——全10回配本

・頁数——各巻平均670頁・総33、470頁

・価格——本体揃価格1、100、000円

大正期刊行開始！

★推薦人——碧海純一・今井清一・斎藤眞・坂本義和・杉原泰雄・松尾尊允

（五十音順）

# 近代日本の憲政の証言

坂本義和

● 東京大学名誉教授

『国家学会雑誌』は、今日では法律学・政治学の専門家以外には余り知られていない。しかし、この雑誌が明治以来の日本で果たしてきた役割は、私たちが考えるより、はるかに大きい。

第一に、国家学会は、公法学、政治学、経済学の研究の振興を目的として、明治二〇年に東京大学(帝国大学法科大学)で発足したが、それは単に学究的な性格のものにとどまらなかった。この学会の誕生は、伊藤博文の激励に負うところが大きかったといわれるように、明治憲法の制定をひかえ、その意味を国民に知らしめるための世論指導を目的としていた。それはドイツ流の国家学を軸として、今日でいう「論壇」のほしりでの役割を演じたのである。

第二に、そうした性格を反映して、学会はその例会での講演に力を注いだ。伊藤などの念頭にあった「世論」の担い手は限られたエリート層であり、講演には「朝野紳士および学術に名のある諸士」が招かれた。こうした講演の掲載刊行が、当時の『国家学会雑誌』の主要な役割の一つであり、時代を知る資料として興味深いものがある。

第三に、初期の『国家学会雑誌』に目立つのは、外国人の学者の寄稿が少なくないことである。明治の東京大学が西欧の多くの学者を受入れ、後発国の大学として彼らの学識の吸収と活用に努力していたことが一見して明らかである。日本の大学や学問の、西欧指向の「国際化」の歴史について考える上でも参考になる。

第四に、後発国日本が、明治末に帝国主義化していく変化も、二つの形でこの雑誌に反映されている。一方では、日露戦争に際して主戦論を唱えた「七博士建白」、それをめぐる「大学教授の言論の自由」の主張が、この雑誌の特集号(明治三八年)として生まれ、貴重な記録となっている。他方で、この頃から、国家よりも社会に焦点をずえる論文が『国家学会雑誌』にもふえて、東京大学の知的エリートの間でも、国家学から社会科学へと学問的関心が移動していくさまが、よく読み取れる。第五に、大正をへて昭和に入るとともに、この雑誌をめぐる政治状況

が厳しさを増してくることが、紙面からもうかがわれる。その中には、学問の場での時代への抗議を示し、後に戦後に開花する学問的蓄積をあらわす論文もみられるが、やがて太平洋戦争下に休刊にいたる。

第六に、戦争の終結とともに、この雑誌にも新しい時代が訪れる。その端的な現われが昭和二一年に三号にわたって、東大法学部のスタッフの総力をあげて編集された「新憲法の研究」という特集である。これは翌年、同名の本として刊行され、新憲法の解釈の道しるべとして、世論に大きな影響を及ぼした。

このように見てくると、明治憲法にかんする啓蒙にはじまり、戦後新憲法の信頼しうる解釈におよぶという、二つの憲法を軸とする『国家学会雑誌』の歴史は、近代日本の公法と政治をめぐる知的認識の歴史についての貴重な証言とあって過言ではない。

## 政治史研究の立場から

今井清一

● 横浜市立大学名誉教授

『国家学会雑誌』を私が始めて手にしたのは、太平洋戦争の真最中だった。恒例の一月号特集「各国政治事情」はもうなくなっており、一九四四(昭和一九)年の初めには特集「近代日本の成立」がうすくなった雑誌で三号続いた。肩書は略すが、これには尾佐竹猛、岡義武、辻清明、丸山真男らの論文が載り、「学徒出陣」で数少なくなった学生たちの話題となった。

最近、たまたま明治末期の『国家学会雑誌』を調べていて、当時の政治問題が随分と取り上げられているのに気が付いた。当時は英国で上院の権限縮小問題が政界をわき立たせていたが、一九一〇(明治四三)年八月号と二一年一月号にはこれに関する小野塚喜平次の講演筆記と論文とが掲載され、国会法が制定された一九一一年の夏が未曾有の炎熱だったことなども含めて経過と意義を詳論している。各国の立憲政治論もある。最近の研究と比べても面白い。その間に富井政章の「貴族院の将来」がある。シーメンス事件と時を同じうして松波仁一郎の軍法会議公開論が載っている。雑録欄では内外の時事問題がかなり詳しくとりあげられ、若手の執筆も多い。

第一次世界大戦当時までは経済学科が法科大学の中に含まれていたこ

明治二十六年十一月二十日発刊許可  
昭和二十六年十一月二十日発刊許可

(毎月一回発行)

大正七年一月一日發行

第三十七一號

編輯

英佛米三政治家ノ大戦観	小野塚喜平次
商務省論	河津 運
皇室ノ大権(一)	美濃部達吉
徳川幕府ノ某商家ノ家風書	中野岩三郎
故杉亨二氏ト本邦ノ統計學	高田 薫
アーノルド・トインビーノ性行(三完)	武蔵 長藏
露國社會主義ト農民	法學士 有川 治助
戰時統制ノ問題	法學士 森戸 辰男
北米ノ物價調節論	法學士 森戸 辰男
現貨ノアルサスローレン問題	法學士 新居 靖之
食料ノ價格ト供給	法學士 新居 靖之
英國戦後ノ社會政策	法學士 森戸 辰男
農會 經濟統計茶話會記事(誠實基金問題)	濱口雄幸
肥前 會計事務廳花ノ交送	堀田 眞
編輯會 會計事務廳花ノ交送	大正六年度終日録

内學大科法學大國帝京東

會 學 家 國

# 國家學會雜誌

第三拾二卷  
第一號

國家學會雜誌第拾貳卷第一號(大正七年一月一日發行)

英佛米三國政治家ノ大戦観

小野塚喜平次

論 說

(一) 大戦觀察ノ精神的方面	歐洲ノ天地ニ未曾有ノ威力ヲ逞フレツツアル今回ノ大戦ハ其因ヲ來ル所遠ク、其原因ハ頗ル多様ナリ。一舉シテ簡明ナル説明ヲ之ニ與ヘントスルハ、真相ヲ得
(二) 英國政治家ノ主張	論 說 英佛米三國政治家ノ大戦観
(三) 佛國政治家ノ主張	
(四) アーノルド・トインビーノ主張	
(五) 政治思想ノ大潮流	

皇室ノ大権(一)

美濃部達吉

日本ニ於ケル皇室法ト國法トノ關係ハ他ノ諸國ニ於ケルモノトハ頗ル異ナリ。居リ、日本ニ特殊ノ研究ヲ要スルモノデ、外國ノ例ヲ以テ之ヲ推スコトハ出來ヌ。最モ著シイ一ニ例ヲ言ヘバ外國ニ於テハ王位ノ繼承ハ國家ノ憲法又ハ法律ニ依リテ定マツテ居ルノデ、之ヲ改正スルニハ國會ノ協賛ヲ得ナクテハナラヌ。日本ニ於テハ皇位ノ繼承ハ専ラ皇室法タル皇室典範ニ依リテ定マツテ居リ、而シテ皇室典範ハ憲法ト同等ノ效力ヲ有ツテ居ルモノデ、憲法ノ改正ヲ以テモ皇位繼承法ヲ變更スルコトハ出來ヌ。外國ニ於テハ王族ハ固ヨリ國家ノ法律ニ服従スル義務アルモノデ、法律ニ依リテ特ニ例外ヲ認メラレタモノ、外ハ總テノ法律ガ原則トシテ王族ニモ適用セラル、ノデアルガ日本ニ於テハ皇族ハ専ラ皇室法ノ支配ヲ受クルノミデ、國家ノ法律ハ原則トシテ凡テ皇族ニハ適用ナク唯皇室法ニ於テ特ニ法律ノ適用アルコトヲ認メタ場合ニノミ例外トシテ法律ガ適用セラル、

ダケデアアル。此等ハ凡テ外國ニハ例ヲ見ナイ所デ皇室法ト國法トノ關係ガ日本ニ於ケルト外國ニ於ケルト著シク異ナツテ居ルコトヲ示スモノデアアル。皇室法ト國法トノ關係ヲ明ニスル爲ニハ先ヅ皇室ノ國法上ノ地位及皇室ノ大権ニ付テ明白ナル思想ヲ得ネバナラヌ。吾輩ハ嘗テ此ノ問題ニ關シテ本誌ニ皇室ノ事務ト國家ノ事務トニ對シテ題シテ卑見ノ一斑ヲ述ベタコトガアツタガ、當時ノ説明ハ簡ニ失シテ意ヲ盡シサヌモノガアルカラ、本稿ニ於テ聊之ヲ敷衍シ江湖ノ致ヲ得タイト思フ。

第一節 皇室ノ法人格

我が皇室ノ國法上ノ地位ニ付テハ吾輩ハ皇室ガ一ノ法人デアアルト解スルコトガ最モ能ク我が皇室法及ビ國法ノ精神ヲ得タモノデアアルト信ズル。皇室ガ法人デアアルトイフ説ハ我が國ニ於テハ未ダ何人モ主張シナイ説デアアルカラ、吾輩ノ此ノ説モ恐クハ容易ニ諸學者ノ同意ヲ得ルコトハ出來ヌコトト、思ハレバ、吾輩ハ敢テ輕々シク此ノ説ヲ主張スル者デハナク、熟考ノ結果斯ク解スルニ依リテ、正當ニ我が皇室法ト國法トノ關係ヲ理解シ得ルモノト信ズルモノデアアル。申ス迄モナク、皇室ハ一ノ家族團體デアアル。天皇ハ其ノ家長ノ地位ニ在リ、皇

ともあつて、経済、労働、社会政策、さらには都市問題などの論文や紹介も目立つ。時報欄、学会記事、新刊紹介なども時代の動きを伝え、なかなか面白い指摘もある。また総合雑誌も少ない時代だけにいろいろな役割を担ったようである。美濃部達吉、上杉慎吉の天皇機関説をめぐる憲法論争がまず本誌で起こり、ついで舞台が博文館発行の『太陽』に移されたことはよく知られている。本誌が復刻されるとさまざまな問題が発見されそうで楽しみである。

# 「海外政治の動向」を伝える

齋藤 眞 ●東京大学名誉教授

「一九四〇年。それは砲煙の中に暮れた」  
これは、『国家学会雑誌』——特輯海外政治の動向（五六巻一、二、三、四、五、六、七、八、九、一〇、一一、一二）における、故岡義武先生執筆の巻頭「国際政治概観」の冒頭の言葉である。続いて、アジア、ドイツ、フランス、イギリス、アメリカ、（ソ連は翌月）についての報告論文がある。ちなみに、イギリスは佐藤功先生、アメリカは故高木八尺先生の執筆になっている。

『国家学会雑誌』は、一九二一年から、毎年「海外政治事情」の欄を設け、一九三九年からは「海外政治の動向」とし、一冊全体をあてて特集をおこなっていた。今でこそ海外の情報は過多なほど入手されるが、戦前限られた資料に基づいて、しかも国家主義の風潮の下で、これだけ客観的、学術的に、海外の政治につき同時代的分析を行い、公刊したものは他にはないであろう。

この「海外政治の動向」は、『国家学会雑誌』の使命のなかでは、ごく限られた分野かもしれないが、今日それ自体、外国政治史、国際政治史研究上の貴重な史料となっているといえよう。復刻版で、再び目にすることができるとを、喜ぶものである。

# 時代との大きなかわり

杉原泰雄 ●東海大学教授

『国家学会雑誌』が復刻される。明治憲法下においては、それは、社会諸科学の総合学術雑誌といふべきものであった。憲法関係についてはいふならば、それは準学術的な性格をもつものであった。各時代の証人として、各時代の様相分析・紹介しているだけでなく、各時代の唱導者としての政治と深くかわつて来た。  
憲法の分野では、明治憲法の制定期には、その導入と運用に備えて、明治憲法の基礎理論、その各部分の解釈論、選挙・予算・地方公共団体等にかんする憲法付属法のあり方が精力的に論じられている。日本における憲法学の事始めの様相がよく現れている。

大正デモクラシー期には、階級闘争、社会主義、現代市民憲法の内外における出現という事情もあつて、社会主義や労働運動が検討の対象とされ、また、ワイマール憲法の紹介、社会国家理念、社会政策の導入、参政権の拡大がしきりと論じられている。

昭和一段階では、大正デモクラシー期の傾向を継承しつつも、同時にファシズム論や国家主義論の登場もみられる。昭和一〇年代には、ナチス・ドイツの特集、執行権強化の特集が生まれ、統制経済の問題が中心問題として登場する。  
明治憲法下における憲法政治と憲法学の動向を知ろうとするならば、手にしないわけにはいかない重みをもっている。研究者・研究誌の時代とのかかわり方についても、考えさせられる経験を含んでいるようである。

# 尽きぬ生命力

松尾尊亮 ●京都橘女子大学教授

『国家学会雑誌』が、現在でも、日本の政治学界において卓越した地位を占めていることはいうまでもないが、戦前、とくに第一次大戦直後までは、ひろく社会科学研究の大宗であった。政治学のみならず、公法学や経済学の日本における発達の歴史を調べようと思えば、まず本誌をひもとかねばならない。

## 国家学会會員姓名 (明治二十一年一月調査)

在豆州海部	井上 圓了	在清國上海日本領事館	法學士 伊東 祐徳	在清國天津日本領事館	法學士 一木喜徳郎
在清國天津日本領事館	法學士 石井 常英	在清國天津日本領事館	法學士 伊藤 主計	在清國天津日本領事館	法學士 石尾一郎助
在清國天津日本領事館	法學士 板垣不二男	在清國天津日本領事館	法學士 井上哲次郎	在清國天津日本領事館	法學士 井上一男
在清國天津日本領事館	法學士 石塚 英藏	在清國天津日本領事館	法學士 井上辰九郎	在清國天津日本領事館	法學士 伊集院兼良
在清國天津日本領事館	法學士 伊集院彦吉	在清國天津日本領事館	法學士 磯谷幸次郎	在清國天津日本領事館	法學士 濱田健次郎
在清國天津日本領事館	法學士 原口 敏行	在清國天津日本領事館	法學士 權助 四郎	在清國天津日本領事館	法學士 林田龜太郎
在清國天津日本領事館	法學士 堀 真太郎	在清國天津日本領事館	法學士 西 周	在清國天津日本領事館	法學士 橋本圭三郎
在清國天津日本領事館	法學士 西山猪之助	在清國天津日本領事館	法學士 穂積 重直	在清國天津日本領事館	法學士 西澤正太郎
在清國天津日本領事館	法學士 八尋 正一	在清國天津日本領事館	法學士 土岐 儀	在清國天津日本領事館	法學士 友平 甲子
在清國天津日本領事館	法學士 伴野 乙彌	在清國天津日本領事館	法學士 富井 政章	在清國天津日本領事館	法學士 床次竹二郎
在清國天津日本領事館	法學士 藤井 啓一	在清國天津日本領事館	法學士 小川 忠武	在清國天津日本領事館	法學士 千頭 清臣
在清國天津日本領事館	法學士 藤井 啓一	在清國天津日本領事館	法學士 小川 忠武	在清國天津日本領事館	法學士 李家 隆介
在清國天津日本領事館	法學士 藤井 啓一	在清國天津日本領事館	法學士 小川 忠武	在清國天津日本領事館	法學士 小野 彌一
在清國天津日本領事館	法學士 藤井 啓一	在清國天津日本領事館	法學士 小川 忠武	在清國天津日本領事館	法學士 大島國千代
在清國天津日本領事館	法學士 藤井 啓一	在清國天津日本領事館	法學士 小川 忠武	在清國天津日本領事館	法學士 大塚 熊雄



私のような日本近代史研究者にとつても、本誌は重要な資料である。著作集はおろか単行本にもおさめられていない吉野作造や佐々木惣一の執筆した重要な論文の数多くが、本誌に見出される。それらは彼らの思想を研究するための材料となるだけでなく、それ自体がまだ生命力を持っている。たとえば吉野の「清国在勤の日本人教師」は、この主題に関する最近の専門書にも利用されていない貴重な体験記録であり、佐々木の「臨時外交調査会と憲法の一大重大原則」は、寺内正毅内閣に対するもつとも徹底的な学問的批判である。

十五年戦争下に書かれた河村又介の選挙制度史研究や、岡義武の日本近代政治史研究も、単に戦時下における学問的抵抗の一資料にとどまらない、水準の高さを示している。

事情はおそらく他専攻の人びとにとつても同様であろう。本誌の復刻が益するのは、政治学界だけではないのである。

# 『国家学会雑誌』復刻について

碧海純一 ● 関東学院大学教授

『国家学会雑誌』は『法学協会雑誌』と並んで旧東京帝国大学法学部及び現東大法学部の機関誌である。その刊行は明治二〇年に遡り、第二次大戦中の戦災もあつて、バックナンバーを揃えることは現在では至難となつてしまつた。このたび、書籍、定期刊行物、資料などの復刻に実績のある不二出版社によつて、その創刊号から昭和一九年に至る全号の復刻版が順次出版されることは諸大学、研究所、図書館などにとつて大きな福音である。

その主たる内容は政治学、公法学、基礎法学にわたり、日本の近代化の過程におけるこれらの学問の発展の研究に資するところ極めて大である。特に、新設の法学部や図書館にとつては、不可欠の文献と言つてよい。望蜀の感を述べる事が許されるならば、本誌の戦後の号及び『法学協会雑誌』の復刻も今回の企画に続いて漸次実現することを期待して止まない。

## 支那第一革命ヨリ第三革命マデ(三)

吉野 作造

第三 袁世凱ノ總統專制  
(一) 總統專制主義ノ漸進的の確立  
(二) 袁ノ高壓政策ト第二革命ノ勃發  
(三) 正式大統領ノ選舉トクーデターノ斷行

### (一) 總統專制主義ノ漸進的の確立

前述ノ如ク南北妥協ハ、南方ガ袁世凱ニ讓歩シタ形ニ於テ成立シタ。此際獨リ孫逸仙ハ或點マデ袁世凱ヲ信用シタサウデアアルガ、多クノ他ノ革命黨員ハ皆彼ノ從來ノ人ト爲リヨリ推シテ、其結局共和主義ニ忠實ナラザルベキヲ疑フタトイフ事デアアル故ニ勢ヒ已ムヲ得ズ袁世凱ニ讓ルハ讓ツタガ共和主義ノ擁護ノ爲ニハ餘程用心シナケレバナラヌトイフノガ一般ノ考デアツタ中ニハ好辭ヲ設ケテ袁ヲ南京ニ招キ機ヲ見テ之ヲ殺シテ仕舞ヘトカ、又ハ袁トハ大猿モ管ナラザル春燈ヲ起シテ討袁ノ別働隊ヲ作レトカイフヤウナ意見モ出タサウデアアル。何レニシテモ袁ニ對シテハ除程用心シナケレバナラヌトイフノデ色々苦心シタコトハ疑フ

論 說 支那第一革命ヨリ第三革命マデ(三) 第三十一卷 第一號 七九(一) 七九

容レナイ而シテ彼等ハコノ苦心ノ結果相續イテ色々ノ策ヲ取ツタノデアアル。

第一ニ取ツタ策ハ、新臨時大統領ノ袁世凱ニ中華民國發祥ノ地タル南京ニ來テ就任式ヲ舉ゲテ貰ハウトイフ要求デアアル。尤モ之ハ必シモ、南京ヲ首府ニシヤウト主張トスルノデハナイ。南京首府説モ會ツテ唱ヘラレヌデハナカッタガ、國會ノ決議ノ結果此時ハ北京説ニ定マツテ居ッタノデアアル。只目下中華民國ノ中央政府ハ南京ニ在ルカラ大統領ノ就任式ハ南京デ舉グ其上デ政府ヲ北ニ移スベシトイフノデアアル。之ハ實ハ袁モ承知ナノデアアル。處ガ彼ハドウシテモヤツテ來ナイ。南方デハ體面上無理ニモ引ツ張ツテ來ヤウトイフノデ、二月二十一日ニ歡迎使ナルモノヲ出シタ。ゾレガ北京ニ二十七日ニ着イタ其時袁世凱ハ非常ニ之ヲ歡迎シテ鄭重ノ限リヲ盡シタ。然ルニ着イタ翌々晚ノ二十九日ノ夜ニ北京天津ノ各地デ三十日ニハ保定ニモアツタガ突如亂民ノ大掠奪トイフコトガ起ツタ。之レガ實ハ袁ガ部下ノ兵隊ヲ使賊シテヤラセタモノナルコトハ後ニ至ツテ分ツタノデアアル。其時ニハ無論分ラナイ。サレ 袁ガ自分ガ居ツテサヘ此通り北方ノ形勢ガ不穩デアアルト説明スルヤ、歡迎使ハ「一モ二モナク尤モダト贊同シテ、遂ニ袁ノ南行其儘沙汰ヤミトナツタ蓋北方ノ不穩ハ即チ外國ノ干渉ヲ誘致スルノ惧アリトイフ點ガ特ニ歡迎使ノ

『国家学会雑誌』(大正期)復刻版概要

・巻数——全50巻  
 ・配本——全10回配本('96年10月～'99年10月)  
 ・体裁——A5判・上製本  
 ・分売——各巻ごとの分売可(各巻≒22,000円)  
 ・頁数——各巻平均670頁  
 ・価格——本体価格1、100、000円  
 総頁数333,470頁

配本案内

回配本	復刻版巻数	原本号数	発行年月	配本年月(西暦)	本体価格
第13回配本	第58～62巻	第307～326号	大正元年9月～3年4月	'96年10月	11万円
第14回配本	第63～67巻	第327～343号	大正3年5月～4年9月	'97年1月	11万円
第15回配本	第68～72巻	第344～358号	大正4年10月～5年12月	'97年7月	11万円
第16回配本	第73～77巻	第359～374号	大正6年1月～7年4月	'97年10月	11万円
第17回配本	第78～82巻	第375～394号	大正7年5月～8年12月	'98年1月	11万円
第18回配本	第83～87巻	第395～414号	大正9年1月～10年8月	'98年7月	11万円
第19回配本	第88～92巻	第415～433号	大正10年9月～12年3月	'98年10月	11万円
第20回配本	第93～97巻	第434～448号	大正12年4月～13年6月	'99年1月	11万円
第21回配本	第98～102巻	第449～463号	大正13年7月～14年9月	'99年7月	11万円
第22回配本	第103～107巻	第464～478号	大正14年10月～15年12月	'99年10月	11万円

'99年度

'98年度  
33万円

'97年度  
33万円

'96年度  
32万円

『国家学会雑誌』既刊案内・続刊予定

【明治期】・巻数——全57巻

・明治20年3月～明治45年8月  
 ・揃本体価格1、140、000円

【昭和期】・巻数——第108～167巻・全60巻

・昭和2年1月～昭和19年8月  
 ・「大正期」刊行後逐次刊行予定

本カタログ中の表示価格は、全て消費税を含んでおりません。

※弊社は注文制です。お近くの書店へご注文ください。

不二出版

〒113 東京都文京区向丘一丁目二二  
 TEL 03-3811-2111  
 FAX 03-3811-2443  
 振替 00160194084

★明治20年（一八八七年）創刊の『国家学会雑誌』は、「憲法、行政、法律、財政、外交、経済、統計等国家学ニ属スル論說事項ヲ掲載シテ斯学ヲ研究スルノ資ニ供スル」ことを目的に、百余年の長期間にわたり今日もなお刊行され続けている、學術雑誌の中でも最大級の資料である。

本復刻版は、今日の法律・政治学を中心とする學術研究の宝庫である。

国家学会 編

不二出版

# 國家學會雜誌

【昭和期】 全70卷

（昭和2年1月～19年8月）

・体裁——A5判・上製本クロス装・配本——全14回配本（以上で完結）

・頁数——各巻平均488頁・総34、128頁

・定価——本体揃価格1、400、000円十税

昭和期刊行開始！

★推薦人——碧海純一・今井清一・斎藤眞・坂本義和・杉原泰雄・松尾尊允（五十音順）

# 近代日本の憲政の証言

坂本義和

●東京大学名誉教授

『国家学会雑誌』は、今日では法律学・政治学の専門家以外には余り知られていない。しかし、この雑誌が明治以来の日本で果たしてきた役割は、私たちが考えるより、はるかに大きい。

第一に、国家学会は、公法学、政治学、経済学の研究の振興を目的として、明治二〇年に東京大学（帝国大学法科大学）で発足したが、それは単に学究的な性格のものにとどまらなかった。この学会の誕生は、伊藤博文の激励に負うところが大きかったといわれるように、明治憲法の制定をひかえ、その意味を国民に知らしめるための世論指導を目的としていた。それはドイツ流の国家学を軸として、今日でいう「論壇」のほしりでの役割を演じたのである。

第二に、そうした性格を反映して、学会はその例会での講演に力を注いだ。伊藤などの念頭にあった「世論」の担い手は限られたエリート層であり、講演には「朝野紳士および學術に名のある諸士」が招かれた。こうした講演の掲載刊行が、当時の『国家学会雑誌』の主要な役割の一つであり、時代を知る資料として興味深いものがある。

第三に、初期の『国家学会雑誌』に目立つのは、外国人の学者の寄稿が少なくないことである。明治の東京大学が西欧の多くの学者を受入れ、後発国の大学として彼らの学識の吸収と活用に努力していたことが一見して明らかである。日本の大学や学問の、西欧指向の「国際化」の歴史について考える上でも参考になる。

第四に、後発国日本が、明治末に帝国主義化していく変化も、二つの形でこの雑誌に反映されている。一方では、日露戦争に際して主戦論を唱えた「七博士建白」、それをめぐる「大学教授の言論の自由」の主張が、この雑誌の特集号（明治三八年）として生まれ、貴重な記録となっている。他方で、この頃から、国家よりも社会に焦点をずえる論文が『国家学会雑誌』にもふえて、東京大学の知的エリートの間でも、国家学から社会科学へと学問的関心が移動していくさまが、よく読み取れる。第五に、大正をへて昭和に入るとともに、この雑誌をめぐる政治状況

が厳しさを増してくることが、紙面からもうかがわれる。その中には、学問の場での時代への抗議を示し、後に戦後に開花する学問的蓄積をあらわす論文もみられるが、やがて太平洋戦争下に休刊にいたる。

第六に、戦争の終結とともに、この雑誌にも新しい時代が訪れる。その端的な現われが昭和二一年に三号にわたって、東大法学部のスタッフの総力をあげて編集された「新憲法の研究」という特集である。これは翌年、同名の本として刊行され、新憲法の解釈の道しるべとして、世論に大きな影響を及ぼした。

このように見てくると、明治憲法にかんする啓蒙にはじまり、戦後新憲法の信頼しうる解釈におよぶという、二つの憲法を軸とする『国家学会雑誌』の歴史は、近代日本の公法と政治をめぐる知的認識の歴史についての貴重な証言と見て過言ではない。

## 政治史研究の立場から

今井清一

●横浜市立大学名誉教授

『国家学会雑誌』を私が始めて手にしたのは、太平洋戦争の真最中だった。恒例の一月号特集「各国政治事情」はもうなくなっており、一九四四（昭和一九）年の初めには特集「近代日本の成立」がうすくなった雑誌で三号続いた。肩書は略すが、これには尾佐竹猛、岡義武、辻清明、丸山真男らの論文が載り、「学徒出陣」で数少なくなった学生たちの話題となった。

最近、たまたま明治末期の『国家学会雑誌』を調べていて、当時の政治問題が随分と取り上げられているのが付いた。当時は英国で上院の権限縮小問題が政界をわき立たせていたが、一九一〇（明治四三）年八月号と二一年一月号にはこれに関する小野塚喜平次の講演筆記と論文とが掲載され、国会法が制定された一九一一年の夏が未曾有の炎熱だったことなども含めて経過と意義を詳論している。各国の立憲政治論もある。最近の研究と比べても面白い。その間に富井政章の「貴族院の将来」がある。シーメンス事件と時を同じうして松波仁一郎の軍法会議公開論が載っている。雑録欄では内外の時事的問題がかなり詳しくとりあげられ、若手の執筆も多い。

第一次世界大戦当時までは経済学科が法科大学の中に含まれていたこ

### 論 説

恩赦権の史的基礎

標準生計費論(二) 卷

「古カトリシスム」時代に於ける司教兼任について(四)

### 紹 介

都留重人「米國の政治と經濟政策」(昭和十九年)

デオクレチアヌス帝の最高物價並びに貨金報關統制令の研究(一)

比島人の經濟意識(二)

「古カトリシスム」時代の司教兼任について(五) 卷

# 國家學會雜誌

第五十八卷 第七號

東北帝國大學教授 中村 哲

東京帝國大學教授 大河内 一男

東京帝國大學助手 吉田 道也

東京帝國大學助手 吉田 道也

東京帝國大學助手 吉田 道也

東京帝國大學助手 吉田 道也

東京帝國大學助手 吉田 道也

東京帝國大學助手 吉田 道也

東京帝國大學助手 吉田 道也

東京帝國大學助手 吉田 道也

東京帝國大學助手 吉田 道也

東京帝國大學助手 吉田 道也

東京帝國大學助手 吉田 道也

東京帝國大學助手 吉田 道也

東京帝國大學助手 吉田 道也

東京帝國大學助手 吉田 道也

東京帝國大學助手 吉田 道也

東京帝國大學助手 吉田 道也

東京帝國大學助手 吉田 道也

東京帝國大學助手 吉田 道也

東京帝國大學助手 吉田 道也

東京帝國大學助手 吉田 道也

東京帝國大學助手 吉田 道也

東京帝國大學助手 吉田 道也

東京帝國大學助手 吉田 道也

東京帝國大學助手 吉田 道也

東京帝國大學助手 吉田 道也

東京帝國大學助手 吉田 道也

東京帝國大學助手 吉田 道也

東京帝國大學助手 吉田 道也

東京帝國大學助手 吉田 道也

東京帝國大學助手 吉田 道也

東京帝國大學助手 吉田 道也

東京帝國大學助手 吉田 道也

東京帝國大學助手 吉田 道也

東京帝國大學助手 吉田 道也

東京帝國大學助手 吉田 道也

東京帝國大學助手 吉田 道也

東京帝國大學助手 吉田 道也

東京帝國大學助手 吉田 道也

東京帝國大學助手 吉田 道也

東京帝國大學助手 吉田 道也

東京帝國大學助手 吉田 道也

東京帝國大學助手 吉田 道也

東京帝國大學助手 吉田 道也

東京帝國大學助手 吉田 道也

東京帝國大學助手 吉田 道也

東京帝國大學助手 吉田 道也

東京帝國大學助手 吉田 道也

東京帝國大學助手 吉田 道也

東京帝國大學助手 吉田 道也

東京帝國大學助手 吉田 道也

東京帝國大學助手 吉田 道也

東京帝國大學助手 吉田 道也

東京帝國大學助手 吉田 道也

東京帝國大學助手 吉田 道也

東京帝國大學助手 吉田 道也

東京帝國大學助手 吉田 道也

東京帝國大學助手 吉田 道也

東京帝國大學助手 吉田 道也

東京帝國大學助手 吉田 道也

東京帝國大學助手 吉田 道也

東京帝國大學助手 吉田 道也

東京帝國大學助手 吉田 道也

東京帝國大學助手 吉田 道也

東京帝國大學助手 吉田 道也

東京帝國大學助手 吉田 道也

東京帝國大學助手 吉田 道也

東京帝國大學助手 吉田 道也

### 内容見本

(642)

#### 比島人の經濟意識(二)

東 畑 精 一

- 一 種々の問題
- 二 比島に於ける經濟意識の源流
- 三 比島に於ける元住社會(以上、四月號)
- 四 比島に於ける社會意識の源流
- 五 スパイアカントによる比島人の形成(以上本誌)

#### 四 比島人は遊惰であるか

比島の一般大衆に就いて其の經濟意識の構成に與つて力がある諸條件を比較し分析しよう。思ふにこれに關しては「(一)の側面」乃至は方法——から接近してゆくことが出来るであらう。前項に云つたように、一つは其の社會の成立過程の自然的條件の検討から進む方法と、他は其の社會の文化、歴史などの考察に至る方法である。一 昔てスパイアカントは十九世紀末頃に於ける社會心理學的分析的な考察を以て、當々たる著述をなした。A. Vahlund, Kulturvolker und Kulturvolker, Leipzig 1896, 417 S. 乃れその。その書は彼のそのはゆる全文化(Volkkultur)と半開文化(Halbkultur)との分類を標榜して、諸民族の行動に客觀的に現はれたところから夫々の意識の内容、殊に意識活動の諸特徴を明かにしたものである。當時盛んに究明、出版せられた西洋諸國の植民地原住民の意識の研究を集成し之れと西洋諸國の夫れと對比せるものでつた。互相關なく論議せられた諸點は今日尙ほわれに對して教へるところが多い。しかし夫れにかまはらず、完全文化を備つてゐる文化民族

(643)

「自然」——「生理人」としての側面が強く出でてゐる場合、或は「自然」としてのみ行動する場合があつ

ともあって、経済、労働、社会政策、さらには都市問題などの論文や紹介も目立つ。時報欄、学会記事、新刊紹介なども時代の動きを伝え、なかなか面白い指摘もある。また総合雑誌も少ない時代だけにいろいろな役割を担ったようである。美濃部達吉、上杉慎吉の天皇機関説をめぐる憲法論争がまず本誌で起こり、ついで舞台が博文館発行の『太陽』に移されたことはよく知られている。本誌が復刻されるとさまざまな問題が発見されそうで楽しみである。

### 「海外政治の動向」を伝える

齋藤 眞 ●東京大学名誉教授

「一九四〇年。それは砲煙の中に暮れた」

これは、『国家学会雑誌』——特輯海外政治の動向(五六巻一、二、三、四、五、六、七、八、九、一〇、一一、一二、一三、一四、一五、一六、一七、一八、一九、二〇、二一、二二、二三、二四、二五、二六、二七、二八、二九、三〇、三一、三二、三三、三四、三五、三六、三七、三八、三九、四〇、四一、四二、四三、四四、四五、四六、四七、四八、四九、五〇、五一、五二、五三、五四、五五、五六、五七、五八、五九、六〇、六一、六二、六三、六四、六五、六六、六七、六八、六九、七〇、七一、七二、七三、七四、七五、七六、七七、七八、七九、八〇、八一、八二、八三、八四、八五、八六、八七、八八、八九、九〇、九一、九二、九三、九四、九五、九六、九七、九八、九九、一〇〇)における、故岡義武先生執筆の巻頭「国際政治概観」の冒頭の言葉である。続いて、アジア、ドイツ、フランス、イギリス、アメリカ、(ソ連は翌月)についての報告論文がある。ちなみに、イギリスは佐藤功先生、アメリカは故高木八尺先生の執筆になっている。

『国家学会雑誌』は、一九二二年から、毎年「海外政治事情」の欄を設け、一九三九年からは「海外政治の動向」とし、一冊全体をあてて特集をおこなっていた。今でこそ海外の情報は過剰なほど入手されるが、戦前限られた資料に基づいて、しかも国家主義の風潮の下で、これだけ客観的、学術的に、海外の政治につき同時代的分析を行い、公刊したものは他にないであろう。

この「海外政治の動向」は、『国家学会雑誌』の使命のなかでは、ごく限られた分野かもしれないが、今日それ自体、外国政治史、国際政治史研究上の貴重な史料となっているといえよう。復刻版で、再び目にすることができると、喜ぶものである。

### 時代との大きなかわり

杉原泰雄 ●駿河台大学法学部長

『国家学会雑誌』が復刻される。明治憲法下においては、それは、社会諸科学の総合学術雑誌といべきものであった。憲法関係についていうならば、それは準学術的な性格をもつものであった。各時代の証人として、各時代の様相分析・紹介しているだけでなく、各時代の唱導者としての政治と深くかわっていった。

憲法の分野では、明治憲法の制定期には、その導入と運用に備えて、明治憲法の基礎理論、その各部分の解釈論、選挙・予算・地方公共団体等にかんする憲法付属法のあり方が精力的に論じられている。日本における憲法学の事始めの様相がよく現れている。

大正デモクラシー期には、階級闘争、社会主義、現代市民憲法の内外における出現という事情もあって、社会主義や労働運動が検討の対象とされ、また、ワイマール憲法の紹介、社会国家理念、社会政策の導入、参政権の拡大がしきりと論じられている。

昭和一段階では、大正デモクラシー期の傾向を継承しつつも、同時にファシズム論や国家主義論の登場もみられる。昭和一〇年代には、ナチス・ドイツの特集、執行権強化の特集が組まれ、統制経済の問題が中心問題として登場する。

明治憲法下における憲法政治と憲法学の動向を知ろうとするならば、手にしないわけにはいかない重みをもっている。研究者・研究誌の時代とのかかわり方についても、考えさせられる経験を含んでいるようである。

### 尽きぬ生命力

松尾尊允 ●京都橘女子大学教授

『国家学会雑誌』が、現在でも、日本の政治学界において卓越した地位を占めていることはいうまでもないが、戦前、とくに第一次大戦直後までは、ひろく社会科学の研究の大宗であった。政治学のみならず、公法学や経済学の日本における発達の歴史を調べようと思えば、まず本誌をひもとかねばならない。

Table with columns for membership details, including names like 安中忠雄, 阿刀田敏郎, 阿部泰二, etc., and their respective addresses and affiliations.

Table with columns for membership details, including names like 天野富一, 天野文吉, 雨宮龍吉, etc., and their respective addresses and affiliations.

Table with columns for membership details, including names like 猪間信一郎, 飯田直次郎, 池田寅三郎, etc., and their respective addresses and affiliations.



『国家学会雑誌』〔昭和期〕復刻版概要

・巻数 — 全70巻  
 ・配本 — 全14回配本（'00年1月～'04年7月）  
 ・体裁 — A5判・上製本クロス装  
 ・分売 — 各巻ごとの分売可（各巻≒20,000円＋税）

・頁数 — 各巻平均4800頁  
 ・総頁数34,128頁  
 ・定価 — 本体揃価格1,400,000円＋税

配本案内 ISBN

・復刻版巻数

・原本号数

・発行年月

・配本年月（西暦）

・本体価格

第23回配本 4-8350-2810-4	第108～112巻	第479～493号	昭和2年1月～3年3月	'00年1月	10万円	'99年度 32万円
第24回配本 4-8350-2816-3	第113～117巻	第494～505号	昭和3年4月～4年3月	'00年7月	10万円	'00年度 30万円
第25回配本 4-8350-2822-8	第118～122巻	第506～520号	昭和4年4月～5年6月	'00年10月	10万円	
第26回配本 4-8350-2828-7	第123～127巻	第521～535号	昭和5年7月～6年9月	'01年1月	10万円	'01年度 30万円
第27回配本 4-8350-2834-1	第128～132巻	第536～550号	昭和6年10月～7年12月	'01年7月	10万円	
第28回配本 4-8350-2840-6	第133～137巻	第551～565号	昭和8年1月～9年3月	'01年10月	10万円	'02年度 30万円
第29回配本 4-8350-2846-5	第138～142巻	第566～580号	昭和9年4月～10年6月	'02年1月	10万円	
第30回配本 4-8350-2852-X	第143～147巻	第581～595号	昭和10年7月～11年9月	'02年7月	10万円	'03年度 30万円
第31回配本 4-8350-2858-9	第148～152巻	第596～610号	昭和11年10月～12年12月	'02年10月	10万円	
第32回配本 4-8350-2864-8	第153～157巻	第611～625号	昭和13年1月～14年3月	'03年1月	10万円	'03年度 30万円
第33回配本 4-8350-2870-8	第158～162巻	第626～640号	昭和14年4月～15年6月	'03年7月	10万円	
第34回配本 4-8350-2876-7	第163～167巻	第641～655号	昭和15年7月～16年9月	'03年10月	10万円	'04年度 30万円
第35回配本 4-8350-2882-1	第168～172巻	第656～670号	昭和16年10月～17年12月	'04年1月	10万円	
第36回配本 4-8350-2888-0	第173～177巻	第671～690号	昭和18年1月～19年8月	'04年7月	10万円	

表示価格は、全て税別

不二出版

〒113-0023 東京都文京区向丘一丁目二二  
 TEL 〇三―三八二―四四三三  
 FAX 〇三―三八二―四四六四  
 振替 〇〇―一六〇―二九四〇八四